

日蓮大聖人御書全集

はきいさぶろうどのごへんじ

波木井三郎殿御返事

新版
1808
〜
1814

はきいさぶろうどのごへんじ

波木井三郎殿御返事

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

なんぶのろくろうさぶろう

文永10年('73)

8月3日

52歳

南部六郎三郎

ちようせきと

きた

鳥跡飛び来れり。

ふしん

は

しつぷう

じゅううん

ま

めいげつ

む

不審の晴るること、疾風の重雲を巻いて明月に向かうが

ほうもん

とうせい

ひと

じょうげ

ろん

しんじん

ごとし。ただし、この法門、当世の人、上下を論ぜず信心を

と

がた

ゆえ

ぶつぽう

しゅぎよう

げんぜあんのん

取り難し。その故は、仏法を修行するは「現世安穩にして、

のち

ぜんしよ

しよう

とううんぬん

にちれんほつし

ほけきよう

後に善処に生ず」等云々。しかるに、日蓮法師、法華経の

ぎようじや

しよう

るなんおお

まさ

し

ぶつゐ

行者と称すといえども、留難多し。当に知るべし、仏意に

かな

とううんぬん

叶わざるか等云々。

ただし、この邪難は先案の内なり。御勘氣を蒙るの後始め

きようふ

て驚怖すべきにあらず。その故は、法華經の文を見聞する

まつぼう

い

おし

ほけきよう

しゆぎよう

もの

るなん

に、末法に入つて教えのごとく法華經を修行する者は留難

おお

よし

きようもんかつかく

まなこあ

もの

み

多かるべきの由、經文赫々たり。眼有らん者はこれを見る

か。

ほけきよう

だいし

い

によらい

げん

いま

いわゆる、法華經の第四に云わく「如来の現に在すすら

おんしつおお

めつど

のち

なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。

ご

まき

い

いつさいせけん

あだおお

しん

がた

とう

また五の卷に云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」等

うんぬん

い

もろもろ

むち

ひと

あつく

め

りとう

云々。また云わく「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、

とうじよう

がりやく

くわ

あ

とううんぬん

い

あく

刀杖・瓦礫を加うるもの有らん」等云々。また云わく「悪

せ なか

びく

とううんぬん

い

あれんにや

のうえ

世の中の比丘」等云々。また云わく「あるいは阿練若に納衣

くうげん

あ

あ

ないしびやくえ

ほう

と

にして空閑に在るもの有らん乃至白衣のために法を説いて、

よ

くぎよう

ろくつう

らかん

世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくなら

とううんぬん

い

つね

だいしゆ

なか

あ

われ

そし

ん」等云々。また云わく「常に大衆の中に在って我らを毀ら

ほつ

ゆえ

こくおう

だいじん

ばらもん

こじ

よ

びく

んと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘

しゆ

む

ひぼう

われ

あく

と

とううんぬん

い

衆に向かつて、誹謗して我が悪を説かん」等云々。また云わ

あつき

み

い

われ

めり

きにく

とううんぬん

く「悪鬼はその身に入つて、我を罵詈・毀辱せん」等云々。

い

ひんずい

とううんぬん

また云わく「しばしば擯出せられん」等云々。

だいねはんぎよう

い

いつせんだいあ

らかん

かたち

な

大涅槃經に云わく「一闡提有つて、羅漢の像を作して

くうしよ

じゆう

ほうどうだいじようきようてん

ひぼう

もろもろ

ぼんぷにんみお

空処に住し、方等大乗經典を誹謗す。諸の凡夫人見已

みな

しん

あらかん

だいぼさつ

い

わつて、皆『真の阿羅漢にして、これ大菩薩なり』と謂わ

とううんぬん

い

しやうほうめつ

のち

ぞうほう

なか

ん」等云々。また云わく「正法滅して後、像法の中におい

まさ

びくあ

りつ

たも

に

すく

きよう

て、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少しく經を

どくじゆ

おんじき

とんし

み

じようよう

ないしけさ

き

読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す乃至袈裟を服ると

りようし

ほそ

み

しず

い

ねこ

いえども、なお獺師の細めに視て徐かに行くがごとく、猫の

ねずみ

うかが

とううんぬん

鼠を伺うがごとし」等云々。

はつないおんぎよう

い

あらかん

に

いつせんだいあ

ないし

また般泥洹經に云わく「阿羅漢に似たる一闡提有り乃至」

とううんぬん

等云々。

よ みようきよう ささ も にほんこく ひ む

予、この明鏡を捧げ持って、日本国に引き向けてこれ

う いちぶん かく な あれんにや のうえ

を浮かべたるに、一分も陰れ無し。「あるいは阿練若に納衣

くうげん あ あ なんびと よ くぎよう

にして空閑に在るもの有らん」とは、何人ぞや。「世の恭敬

ろくつう らかん

するところとなること、六通の羅漢のごとくならん」とは、

なんびと もろもろ ぼんぷみお みな しん あらかん

また何人ぞや。「諸の凡夫見已わって、皆『真の阿羅漢に

だいぼさつ い たれ

して、これ大菩薩なり』と謂わん」とは、これまた誰ぞや。

りつ たも すこ きよう どくじゆ

「律を持って少しく経を読誦す」とは、またいかん。

きようもん ほとけ ぶつげん まつぼう はじ

かくのごとき経文は、仏、仏眼をもつて末法の始めを

しようけん

とうせい あ

ひとびとな

せ

照見したもう。

当世に当たつてこれらの人々無くんば、世

そんな
みようらん

ほんじやくにもん

そうりん

じようじゅう

たればと

尊の謬乱なり、この本迹二門と双林の常住と、誰人か

しんよう

これを信用せん。

いま にちれん ぶつご

しんじつ

あらわ

にほん

はいとう

今、日蓮、仏語の真実を顕さんがため、日本に配当して

きよう どくじゆ

あれんにや

あ

くうしよ

じゅう

この経を読誦するに、「あるいは阿練若に有り」「空処に住

とう

けんちようじ

じゆふくじ

ごくらくじ

けんにんじ

とうふくじ

す」等というは、建長寺・寿福寺・極楽寺・建仁寺・東福寺

とう にほんこく

ぜん

りつ

ねんぶつとう

てらでら

まじ

等の日本国の禅・律・念仏等の寺々なり。これらの魔寺は、

ひえいざんとう

ほつけてんだいとう

ぶつじ

は

しゅつたい

比叡山等の法華天台等の仏寺を破せんがために出来る

のうえ

りつ

たも

とう

とうせい

ご

しち

なり。「納衣にして」「律を持って」等とは、当世の五・七・

く けさ き じさいとう よ ぐぎよう

九の袈裟を着たる持斎等なり。「世の恭敬するところとなる」

だいぼさつ

どうりゆう りようかん しょういちとう

よ

「これ大菩薩なり」とは、道隆・良観・聖一等なり。「世」

とうせい こくしゅうとう

もろもろ むち ひとあ

もろもろ

というは当世の国主等なり。「諸の無智の人有らん」「諸

ぼんぷにん とう

にほんこくじゅう じようげばんにん

の凡夫人」等とは、日本国中の上下万人なり。

にちれん ぼんぷ

ゆえ ぶつきよう しん

日蓮、凡夫たるの故に仏教を信ぜず。ただし、このこと

すいか

て あ

し

においては水火のごとく手に当ててこれを知れり。ただし、

ほけきよう ぎようじやあ

あつく めり とうじよう ひんずい

「法華經の行者有れば、悪口・罵詈・刀杖・擯出せらる

とううんぬん

きようもん

せけん はいとう

いちにん

べし」等云々。この經文をもつて世間に配当するに、一人

な

たれ

ほけきよう

ぎようじや

てきじん

もこれ無し。誰をもつてか法華經の行者となさん。敵人は

ありといえども、法華經の持者は無し。譬えば、東有つて
西無く、天有つて地無きがごとし。仏語妄説と成る、いか
ん。

予、自讃に似たりといえども、これを勘え出だして仏語
を扶持す。いわゆる日蓮法師これなり。

その上、仏、不輕品に自身の過去の現証を引いて云わ
く「その時、一りの菩薩有つて、常不輕と名づく」等云々。

また云わく「悪口・罵詈」等。また云わく「あるいは杖木・
瓦石をもつて、これを打擲す」等云々。

しやくそん わ いんい しょぎよう ひ の まつぼう はじ かんれい
釈尊、我が因位の所行を引き載せて、末法の始めを勸励

ふきようぼさつ すで ほけきよう じようもく こうむ
したもう。不軽菩薩、既に法華經のために杖木を蒙つて、

みようかく ごくい のぼ にちれん きよう
たちまちに妙覺の極位に登らせたまいぬ。日蓮、この經の

ゆえ げんしん とうじよう こうむ にどおんる あ とうらい みようか
故に、現身に刀杖を被り、二度遠流に当たる。当來の妙果、

うたが
これを疑うべしや。

によらい めつご し え だいし しょうぞう よ い きよう
如來の滅後に、四依の大士、正像に世に出でてこの經を

ぐつう とき るなんおお ふほうぞう
弘通したもうの時にすら、なお留難多し。いわゆる、付法藏

だいにじゅう だいばぼさつ だいにじゅうご し しそんじやとう いのち
第二十の提婆菩薩、第二十五の師子尊者等、あるいは命を

た くび き は だいはち ぶつだみった だいじゅうさん
断たれ、頸を伐り刎ねらる。第八の仏駄密多、第十三の

りゆうじゅぼさつとう

あか

はた

ささ

も

しちねん

じゅうにねん

おう

竜樹菩薩等は、

赤き幡を捧げ持つて、

七年・十二年、王の

もんぜん

た

じく

どうしよう

そざん

おんる

ほうそ

がい

くわ

門前に立てり。

竺の道生は蘇山に遠流され、法祖は害を加

ほうどうさんぞう

かお

かなやき

お

えおんほつし

かしやく

えられ、法道三蔵は面に火印を捺され、慧遠法師は呵責せ

てんだいだいし

なんぼく

じつし

たいとう

でんぎようだいし

ろくしゆう

られ、天台大師は南北の十師に対当し、伝教大師は六宗の

じゃけん

は

みな

とうおう

けんぐ

ようしゆあ

邪見を破す。これらは、皆、当王の賢愚によつて用取有る

ぶつゐ

かな

しようぞう

のみ。あえて仏意に叶わざるにあらず。正像なおもつてか

まつだい

およ

すで

くのごとし。いかにいわんや末代に及ぶにおいてをや。既に

ほけきよう

ごかんき

こうむ

さいわ

なか

さいわ

法華経のために御勘氣を蒙れば、幸いの中の幸いなり。

がりやく

きんぎん

か

瓦礫をもつて金銀に易うとは、これなり。

なげ

にんのうきよう

い

しょうにんさ

とき

ただし、歎くらくは、仁王経に云わく「聖人去らん時は、

しちなんかなら

お

とううんぬん

しちなん

だいかんばつ

七難必ず起こらん」等云々。七難とは、いわゆる大旱魃・

だいひようらんとう

さいしやうおうきよう

い

あくにん

あいぎよう

大兵乱等これなり。最勝王経に云わく「悪人を愛敬し

ぜんにん

じばつ

よ

ゆえ

しょうしゆく

ふうう

みな

とき

善人を治罰するに由るが故に、星宿および風雨、皆、時を

おこな

とううんぬん

あくにん

あい

たればと

もって行われず」等云々。「悪人を愛す」とは、誰人ぞや。

かみ

あ

しよにん

ぜんにん

じばつ

だればと

上に挙ぐるところの諸人なり。「善人を治罰す」とは、誰人

かみ

あ

ひんずい

もの

ぞや。上に挙ぐるところの「しばしば擯出せられん」の者な

しょうしゆく

にじゅうよねん

てんぺんちやうとう

り。「星宿」とは、この二十余年の天変地天等これなり。

きようもん

にちれん

るざい

こくどめつぼう

せんちやう

経文のごとくんば、日蓮を流罪するは国土滅亡の先兆な

うえ ごかんき いぜん

よし

かんが

い

り。その上、御勘気已前にその由これを勘え出だす。いわ

りつしょうあんこくろん

たれ

うたが

ゆる立正安国論これなり。誰かこれを疑わん。これをも

なげ

って歎きとなす。

めつご

いま

にせんにひやくにじゅうにねん

しょうほういつせんねん

ただし、滅後、今に二千二百一十二年なり。正法一千年

りゅうじゅ

てんじんとう

ほとけ

つか

ほう

ひろ

には、竜樹・天親等、仏の使いとなつて法を弘む。しか

しょうごん

にきよう

ぐつう

りといえども、ただ小権の二教を弘通するのみにして、

じつだいじよう

ぐつう

ぞうほう

い

ごひやくねん

実大乘をばいまだこれを弘通せず。像法に入つて五百年に、

てんだいだいしかんど

しゅつげん

なんぼく

じやぎ

はしつ

しょうぎ

た

天台大師漢土に出現して、南北の邪義を破失して正義を立

きようもん

ごじ

かんもん

いちねんさんぜん

てたもう。いわゆる、教門の五時、觀門の一念三千これな

くに あ しょうしやか な えんじよう
り。国を挙げて小釈迦と号す。しかりといえども、円定・

えんえ ぐせん えんかい ひろ

円慧においてはこれを弘宣して、円戒はいまだこれを弘め

ほとけ めつごいつせんはつぴやくねん い にほん でんぎようだいしよ

ず。仏の滅後一千八百年に入つて、日本の伝教大師世に

しゆつげん きんめい このかたにひやくよねん あいだ ろくしゆう じゃぎ

出現して、欽明より已来二百余年の間の六宗の邪義、こ

はしつ うえ てんだい ひろ えんどんかい

れを破失す。その上、天台のいまだ弘めたまわざる円頓戒、

ぐせん えいざんえんとん たいかい

これを弘宣したもう。いわゆる叡山円頓の大戒これなり。

ほとけ めつごにせんよねん さんちよう あいだ すうまん てらでら

ただし、仏の滅後二千余年、三朝の間、数万の寺々これ

あ ほんもん きようしゆ じとう じゆせんがい

有り。しかりといえども、本門の教主の寺塔、地涌千界の

ぼさつ べつ じゆよ みようほうれんげきよう ごじ

菩薩に別して授与したもうところの妙法蓮華經の五字、い

まだこれを弘通せず。経文は有つて国土には無し。時機の

いまだ至らざる故か。

ほとけ しる い われめつど のち のち ごひやくさい なか

仏、記して云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、

えんぶだい こうせんる ふ だんぜつ とうんぬん

閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなけん」等云々。

てんだい しる い のち ごひやくさい とお みようどう うるお とう

天台、記して云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等

うんぬん でんぎようだいし しる い しようぞう す お

云々。伝教大師、記して云わく「正像やや過ぎ已わつて、

まつぼう ちか あ とううんぬん きようしやく まつぼう

末法はなはだ近きに有り」等云々。これらの経釈は末法の

はじ き しめ

始めを指し示すなり。

げどう しる い わ めつごいっぴやくねん あ ほとけよ

外道、記して云わく「我が滅後一百年に当たつて、仏世

い に出でたもう」云々。儒家、記して云わく「二千年の後、仏法

かんど わた どううんぬん

漢土に渡る」等云々。かくのごとき凡人の記文すら、なお

ふけい

でんきよう てんだい

もつて符契のごとし。いわんや伝教・天台をや。いかにい

しゃか

たほう

こんく

みようき

まさ

し

のこ

わんや釈迦・多宝の金口の明記をや。当に知るべし、残る

ほんもん

きようしゆ

みようほう

ごじ

いちえんぶだい

るふ

ところの本門の教主、妙法の五字、一閻浮提に流布せん

うたが

こと疑いなきものか。

にちれんほつし

たびたび

き

ひとびと

だいなん

ただし、日蓮法師に度々これを聞ける人々、なおこの大難

あ

のち

す

きへん

き

に値つての後、これを捨つるか。貴辺はこれを聞きたもう

いち

りようど

いつときふたとき

す

こと、一・兩度、一時二時か。しかりといえども、いまだ捨

ごしんじん よし

こんじょう

てたまわず御信心の由、これを聞く。ひとえに今生のこと
にあらじ。

みようらくだいしい

ゆえ し

まつだい いちじ き

妙楽大師云わく「故に知んぬ、末代の一時に聞くことを

え き お しん しょう

得て、聞き已わって信を生ずることは、自ずからすべから

しゆくしゆ とううんぬん

うん ぞうまつ こ

く宿種なるべし」等云々。また云わく「運、像末に居し、

しんもん み みよういん う

まこと あ

この真文を矚る。妙因を植えたるにあらずんば、実に遇い

がた とううんぬん ほけきよう い かこ じゅうまんおく ほとけ

難しとなす」等云々。法華経に云わく「過去に十万億の仏

くよう ひと にんげん う ほつけ しん

を供養せるの人、人間に生まれて、この法華を信ぜん」。ま

ねはんぎよう い きれんいちごうくよう ひと あくせ う

た涅槃経に云わく「熙連一恒供養の人、この悪世に生まれ

「きよう しん とううんぬん しゆい
て、この経を信ぜん」等云々〈取意〉。

あじゃせおう ちち さつがい はは きんこ あくにん
阿闍世王は、父を殺害し母を禁固せし悪人なり。しかり

ねはんぎよう ぎ きた ほけきよう ちようもん
といえども、涅槃経の座に来て法華経を聴聞せしかば、

げんざい あくそう じ しじゆうねん じゆみよう えんいん
現在の悪瘡を治するのみにあらず、四十年の寿命を延引し

けつく むこんしよじゆう ぶつき え
たまひ、結句は無根初住の仏記を得たり。

だいばだった えんぶだいいち いっせんだい ひと いちだいししようぎよう す お
提婆達多は、閻浮第一の一闍提の人、一代聖教に捨て置

きよう あ たてまつ てんのうによらい きべつ
かれしかども、この経に値ひ奉つて天王如来の記別を

じゆよ かれ すい まつだい あくにんとう
授与せらる。彼をもつてこれを推するに、末代の悪人等の

じようぶつ ふじようぶつ つみ きようじゆう よ きよう しん
成仏・不成仏は、罪の軽重に依らず、ただこの経の信・

ふしん まか

不信に任すべきのみ。

しかるに、貴辺は、武士の家の仁、昼夜殺生の悪人なり。

いえ す

家を捨てずしてこのところに至つて、いかなる術をもつて

さんあくどう のが

か三悪道を脱るべきか。能く能く思案有るべきか。

ほけきよう こころ

とういそくみよう ふかいほんい もう さいごう す

法華經の心は、当位即妙・不改本位と申して、罪業を捨て

ぶつどう じよう

てんだい い たきよう

ぜん

ずして仏道を成ずるなり。天台云わく「他經は、ただ善に

き あく き

こんきよう みなき とううんぬん みようらくい

のみ記して悪に記せず。今經は皆記す」等云々。妙樂云わ

えんぎよう こころ

ぎやくそくぜじゆん じよ さんきよう

く「ただ円教の意のみ、逆即是順なり。自余の三教は

ぎやくじゆんさだ

ゆえ とううんぬん にぜんぶんぶん とくどう うむ

逆順定まるが故に」等云々。爾前分々の得道の有無のこ

と、これを記すべしといえども、しる 名目を知る人にこれを申もう

すなり。だいたい しっかりといえども、大体これを教うる弟子これ有り。おし でし あ

この輩等を召して、め ほぼこれを聞きくべし。その時ときこれを記しる

し申すべし。もう 恐々謹言。きようきようきんげん

ぶんえいじゆうねんたいさいみずのととりはちがつみつか
文永十年太歳癸酉八月三日

にちれん かおう
日蓮 花押

かいのくになんぶのろくろうさぶろうどのごへんじ
甲斐国南部六郎三郎殿御返事

かまくら ちくごぼう べんのあじやり だいしんのあじやり もう しょうそうとう
鎌倉に筑後房・弁阿闍梨・大進阿闍梨と申す小僧等こ

れ有り。あ め これを召して御尊びあるべし、御談義あるべし。おんたつと ごだんぎ

だいじ ほうもんとう かれ もう にほん るふ
大事の法門等ほぼ彼らに申す。日本にいままだ流布せざる

だいほう
大法、

しょうしょう
少々これ有り。

したが
随つて御学問注し申すべきなり。